

## 【別添 2】

13	東京学芸大学附属世田谷小学校	R1～R5
----	----------------	-------

# 令和 5 年度研究開発自己評価書

## I 研究開発の内容

### 1 教育課程

#### (1) 編成した教育課程の特徴

「学びを自分でデザインする子」の育成を図り, Laboratory, Home, Class の 3 領域を設定した。Laboratory はいわゆる探究的な学習の場であるが, 子ども自身が個を主体として, 学習内容, 探究方法, 目標を設定できることに特徴がある。Home ではいわゆる異年齢集団での生活を通しての学びである。学校において, 第 1 学年から第 6 学年までの発達段階が大きく異なる集団で長期に渡り生活を共にし, 互いを尊重しながら意思決定をしていく場は特徴がある。Class はいわゆる教科学習である。汎用的なスキルの獲得と活用を図っている点と Laboratory と Home のために時数が標準時数よりも少なくなっている。

#### (2) 教育課程の内容は適切であったか

##### ・児童生徒の発達段階, 能力・適正, 興味・関心等の実態

Laboratory は第 3 学年から行うが, 自分に学習の主導権があることを望ましく思っている児童がほとんどである。しかし, 後述するように, 学年・発達段階に関わらず, 問いをもつことや, 探究や表現方法を自在に選択することは難しく, 教員による評価と支援も難しい。Home は, 導入時において通常の教育課程と異なることに負の感情をもつ児童も少なからずいたが, 年次の進行により大きく減少した。校内に同学年集団の学級だけでなく, 居場所があることや異年齢ならではの関わりを好ましく思う児童も多くいた。Class では, 教科担任制になり, 担当教員の教室まで荷物を持って移動する。時間や場所の把握, 持ち物の管理などで苦勞する児童も少なからずいた。教科担任制になり, 専門性が向上したことにより, 興味・関心をより引き出した面もある。

##### ・学年間, 学校段階間の教育課程の一貫性・継続性

Laboratory では, 児童自身が学びに向かうための力(資質・能力, 主体性等)をもっていないと学びに正対できないため, それをいかに育てるかが重要である。本研究では低学年における教科学習に触れていないが, 低学年期における学習はその後に大きく影響する。中学年以降のすべての教科学習も 6 年間の育ちを見越して行う必要がある。高等学校では, 探究科が令和 4 年度から必修となった。本校と同じ東京学芸大学の附属高等学校においても探究的学習の際の難しさはあり, 小学校段階から探究に慣れることや必要な力を身に付けておくことは学習の一貫性・継続性として効果的であると考えられる。附属世田谷中学校でも同様に探究的な学習を行っている。中学校では, テーマが先に決まっていることや知識や技能を習得する段階が明確にされていることが本校とは異なる。探究的な学習を行うことでは一貫しているが, 内容や方法は異なっている。小中高とどのように連携していくかの検討はこれからも行っていく必要がある。Home に関しては, 小学校のみである。異年齢での活動は, 中高でもあるが, Home での影響がどのように関連するか継続的に調査する必要がある。Class においても, 汎用的なスキルをどのように捉えるか, 教科と探究とのつながりをどう捉えるかは今後の検討事項である。

##### ・教科等間の連携性・関連性

Class で学んだことを Laboratory で発揮したり, Class と Class で縦横断したりすることを望ん

で年間計画を立て指導を行っている。しかし、教科担任制もあり、進度や内容の調整は難しさがあった。

### (3) 授業時間等についての工夫

授業1コマを40分間にして、できるだけ毎日、Homeの時間をとるようにした。教科担任制になり、時間割の作成は困難であった。時間割はAとBの2種類を用意し交互に用いた。振替休日などで特定の曜日が欠けることでの特定教科の授業時数の偏りを補うことや、教員の労務の平準化を図った。

## 2 指導方法・教材等

### (1) 実施した指導方法等の特徴

Laboratoryでは、下図のように研究室を教員が開設し、第4学年から第6学年の児童は研究室訪問の上で希望順を記入した。1つのLaboratoryで25人を上限にして、希望順とこれまでのLaboratoryでの学びの連続性を考慮し配属を教員の会議で決定した。教員がLaboratoryを開設する基準は、子どもの学びを広く保証することであるため学びの対象や視点といった観点で多様性をもたせ

**ラボラトリー**  
一人一人が自分の学びを進めたい時間

自分の学びたいこと  
やりたい自分  
めざしたい姿  
に向かう

どういった目標や課題、  
表現方法が  
必要になるか

自分で考えたり  
自分で選んだりする

Laboratoryでのよい学び

- 自分で 問いや テーマを みつかる
- 自分で 学びを進め、記録する
- 自分らしい オリジナルの 学び
- 仲間と、学びに 向かい続ける
- 自分で 学ぶ、仲間や 先生と 学ぶ、メリハリ

「よのなかとつながる Lab.」 希望順番号 高田 先生 (1F 教室)

ニュースや新聞などから感じる「?」や「!」をもう一步自分ごととして深めてみませんか?様々なメカネを通して多様な見方をし、自分だったらどう思うかじっくりと答え、よのなかとつながるクセをつけてみましょう。

「エネルギーLab.」 希望順番号 河野 先生 (第2理科室)

動く、光る、温かい冷たい、音などの現象は、エネルギーが元になっています。エネルギーを自分でつくってみたい、思い通りに使ってみませんか。それをコントロールするためのプログラミングも学びます。  
※ゲームはあつちがいません。

「データLab.」 希望順番号 稲垣 先生 (1C 教室)

〇〇をより速く、〇〇をより遅く、〇〇をより長く、...となるように、データを使って調べ、分析し続けてみませんか。  
〇〇にチャレンジ!!!  
この〇〇は、何がいいですか?

「食Lab.」 希望順番号 今 先生 (家庭科室)

食ラボでは、関心を高めている「食」について本や資料、かんたん実験を通して考えを深めて研究していきます。食を調べるきっかけにして新たな「?」を発見してみましよう。無計画なただ食べるだけ、つけるだけの活動はしません。

「プロフェッショナルLab.」 希望順番号 岸野 先生 (2E 教室)

世の中には、有名人以外にもたくさんすごい人(プロフェッショナル)がいます。その人のすごい技術や思いを知るために大切なのは、検索ではなく、インタビューです。人の姿に迫り、それを伝える番組、つくってみませんか。

「ことばLab.」 希望順番号 清水 先生 (3B 教室)

①ことばを用いた表現活動。②ことばを用いた作品。③ことばを用いた研究するLaboratoryです。①ことばを用いた表現活動とは、読むこと、書くこと、話すこと、聞くことです。②ことばを用いた作品とは、絵本や物語、広告、スピーチなどです。③ことばそのものは、ことばの特徴や働きなどです。

「自由な算数Lab.」 希望順番号 難波 先生 (3E 教室)

皆さんは算数が「自由」だと感じたことはありませんか?算数のおもしろさは、この「自由」にあるのです!算数のおもしろさを知りたい人、算数を使って探究することを楽しみたい人は、ぜひこの研究室にきてください!

「ビジネスLab.」 希望順番号 沼田 先生 (2B 教室)

経済を回すってどういうこと?無料アプリで儲かるの?ローの仕組みってどうなってるの?このQ(なぜ)ってなんのため?効果あるの?流通ってなんだろう? Youtubeやオンラインサロンって儲かるの?などなど、みんなの周りにある「ビジネス」のこと、知ったこともっと楽しくなる。

「スポーツLab.」 希望順番号 久保 先生 (3A 教室)

生活の身近なものとなったスポーツ、好きな人も多くいます。それを、もっと深め、もっと掘り下げてみませんか?「うまくなる」ことを目指すだけでなく、スポーツを考えることは、生きることや社会を考えることにもつながります。興味のある人はぜひ!

「音楽深掘り」 希望順番号 小山 先生 (集会室)

昨年度まで新藤先生が開いていた『音楽深掘り』と同じ内容の研究です。ほくも個人的に『音楽深掘り』を音読かしています。例えば「動かす元気に動いているチチボンの機嫌は歌いえるのか...?」など。ジャンルは問いません。音楽の「なぜ?」を深掘りしてみませんか?

「Science Colloquium」 希望順番号 ~子ども科学者を目指そう~ 堀井 先生 (第1理科室)

自然の事象・現象を研究材料として物議的に議論を行うLab.です。毎週2回の時間のうち、1回を研究活動の日、1回を議論の日にします。研究活動では、各自明確な目的意識をもって実験・観察・調査などを行い、議論では1名30分程度の時間をもって、プレゼンテーションと徹底的な議論を行います。

「てつがくLab.」 希望順番号 木村 先生 (2D 教室)

友達とは? 恋愛とは? 自分とは? だん、何気なくつかっている「当たり前」も、よく考えると難しい。このラボは、「考える」ということのおもしろさを感じるためのラボです。世の中をうたがおう!

「HIPHOP 研究所」 希望順番号 長坂 先生 (1D 教室)

HIPHOP 研究所開設3年目となります。2年目までは、HIPHOPを研究の対象として自己表現を視点に、「つくる」ことを中心に各々が取り組みました。これまでのメンバーの研究成果と課題を基にして、自己表現してつくるモノやコトが何よりどのように貢献できるか、ということに迫ってみませんか?

「みる・つくるLab.」 希望順番号 武田 先生 (第2造形室)

このLab.には、形や色を試しながら表現することを追求したい人が集まります。それは、自分で色々な材料や資料を集め、それらをよくみて、自分がどうしたいのかを考えながら、つくり出すことに熱中する人たちのことです。

「日本文化Lab.」 希望順番号 名瀬 先生 (英語室)

世界的にも日本のカルチャー(文化)って、ますます魅力を集めますよね。そんな自分達の文化について、調べだけでなく、体験し、楽しみ、日本の魅力を再発見していくラボです。最後にはその魅力を世界に発信していきましょう!

「伝統Lab.」 希望順番号 栗田 先生 (3C 教室)

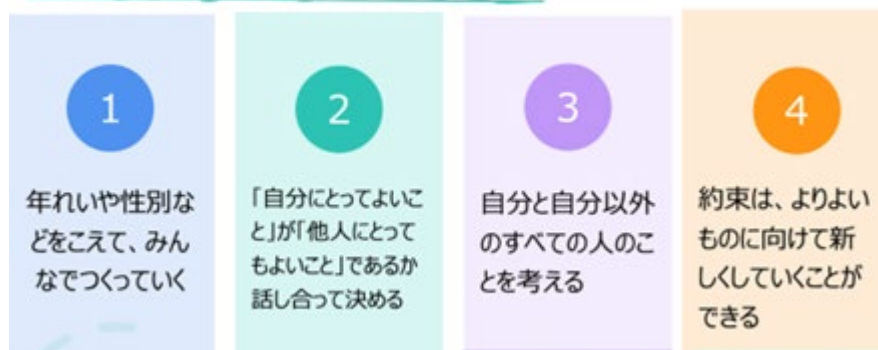
新しいものっていいよね!古いものがどんどん新しく変わっていく今の時代。でも、昔から変わらずに今もまじり込んでいる伝統がある。演劇、技、祭り、道具、武、建物...など。なんでだろう。過去から未来へと続く伝統あるものの秘密を探っていく。

2023 R5  
Laboratory 研究室 一覧

るようにした。学習内容や方法については、児童自身で選択できる環境にするが、何を選んでもLaboratoryとしての学びが成立するわけではないと捉えて、教師の介入を必須とした。その際、「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクトでの汎用的スキル、態度・価値の測定尺度の項目を援用し、それらが発揮されそうかどうかを規準とした。(批判的思考力、問題解決力、協働する力、伝える力、先を見通す力、感性・表現・創造の力、メタ認知力の7つのスキルと他者に対する受容・共感・敬意、協力しあう心、好奇心・探究心、困難を乗り越える力、向上心、正しくあろうとする心、よりよい社会への意識の7つの態度・価値)

Home では、小学校における学び集団の成員の多様性を高めることにより、異質な他者を顕在化させた。その集団で何らかの意思決定をする際に、公正さを保とうとすると、年齢や能力、性別などの成員間の差異を考慮しなければならない。Home では生活をデザインするが、Laboratory での学習者個人が主体となるデザインと異なり、公共における自身の在り方に目を向けることが主となる。これは Home 内のことだけでなく、校内の Home 同士は同じ空間で生活を共にする関係であるため、Home 間においても公正さ、公共性を念頭に生活デザインを行った。延いては、学校外の他のあらゆる集団との関係においても公正さ、公共性を考え意思決定や社会をデザインすることを期待した。生活デザインの機会を設けるために、日常的に Home で食事や清掃、遊びを行った。また、入学や卒業の時期に儀式的行事をつくることや宿泊行事などをカリキュラムとして設定した。Home 担当教員は児童の生活デザインを見守りながら、公正さ、公共性が保てるように支援した。右図の 4 つの大事な考えとして年度当初に指導している。

## Homeで大事にする考え



Class では、基礎的基本的なことが習得できることと学びの履歴を可視化して蓄積していくことを重視した。学期ごとに学校独自のテストを作成し、学習状況の確認と復習による定着を図った。学びの履歴は、タブレット PC を用いてポートフォリオ作成を行った。この 2 つを用いて学期ごとに三者面談を行い、保護者にも学びを支えてもらうよう内容の説明と今後の方針を共有した。また、Class のカリキュラム・マネジメントを全教職員で行い、縦横断にスキルを関連させ、Class での学びの汎用性を感じることや活用すること、関連させることを図った。

## (2) 指導方法等は適切であったか

前述したように Laboratory の活動は、児童の興味・関心に合致し適切だったと考えられる。一方、どの Laboratory においても主体的に学習に向かうことが難しい児童も散見された。それは、それまでの教科学習における資質・能力や汎用的なスキルの獲得に問題がある場合、児童の性向、精神面など様々な原因が考えられる。まずは、教員の指導を見直すことが第一にあり、それ以外の場合においても Laboratory の時間が誰にとっても充実したものになるように改善していく必要がある。

1 つの Laboratory に 25 人を上限としたが教員に対して児童の数が多く十分に探究をフォローできない状況も散見された。一方、所属人数の少ない Laboratory もあった。一人一人の児童の公正な学びの機会としても教員の労務の平準化からしても、人数は均等割りにするほうが望ましい。現状の仕組みでなら均等割りにすると 1 つ当たり 20 人程度となる。これは、Laboratory の開設基準にもよる。できるだけ児童の学びたい対象や視点に沿って Laboratory を開設するようにしたが、対象や分野に偏りや重複が見られる。公教育として多様な学びの場を保障するために、児童が現時点で持っている希望だけに沿うことは適切でないと考え、より慎重に判断し、より広く Laboratory を開設する必要がある。

Home においては、次項で述べるが好ましい成果が多く見られる。異年齢集団で生活をつくることの学びの成果として考えられる。しかし、学校における多くの時間（全体時数の約 1/4）を使って行う必要があるかは精査しなければならない。令和 4 年度実践においては、初の Home 実践であり、探索的に行ったため目的的に活動することを控えたが、令和 5 年度は、それによって漫然とした時間になってしまっているという評価から、学校行事を設定し、それに向けて Home の活動と Home 同士

の交流を促した。目的的に活動することで漫然とはしなくなり、集団としての協働による結束等も高まった。また、他の Home との交流を促すことで他者への受容や共感も生じた。この活動が先鋭化したときに、目的に合致しない言動への排除や圧力が生じ集団内、集団間での分断が生まれることは想定でき、これでは従来の閉塞的な学級と違いがなくなってしまうことも考えられる。

Class においては、基礎的基本的な学習内容の定着のために本校独自のテストを行っている。業者によるテストとは違う視点で作成し、単純な知識再生型にならないように思考・表現や汎用的なスキルの発揮を重視したり、学校での授業の文脈を重視したりしている。日々の授業への参加を見直すこと、学びをデザインできる子として必要なことを自己調整しながら身に付けることを願っているが、一方、劣等感や不安につながる児童や保護者も散見される。学習観のずれによるものだと考えられるが、対話を通じて、よりよい学びのための環境づくりにつなげる必要がある。タブレットPCを用いたポートフォリオでは、単元末に振り返りをするのが学習の定着に効果はありそうだが、それを必要なときに引っ張り出してきて自在に活用することには至っていない。一覧性が低いことや手間がかかることも要因としてあるだろうが、まずは、履歴を使って縦横断に考えることを体験し、その良さを実感できるカリキュラムも必要だと考える。三者面談では、上記のテストのみならず、ポートフォリオを用いて自分の学びを説明できる児童も散見されるようになってきた。後述するが、Class での学びが Laboratory で使えたか、または使えそうかという問いの回答は、教科ごとにその割合や内容が異なった。汎用的なスキルを学びやすい教科と学習内容に強く印象が残る教科の可能性があるのか、児童が持っている学習観の影響があるのか、なども考慮しカリキュラム・マネジメントを行うことでより効果的に教科学習を行うことにつながると考える。

## II 実施の効果

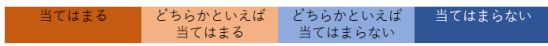
### 1 児童・生徒への効果

全国学力・学習状況調査からは、自己肯定感、責任感、チャレンジ精神、学習の活用、他者への共感性と援助行動、社会をよりよくする態度などにおいてポジティブな変化が見られた。ネガティブな変化としては、学校へ行くことの楽しさ、友人関係への満足度が下がった。

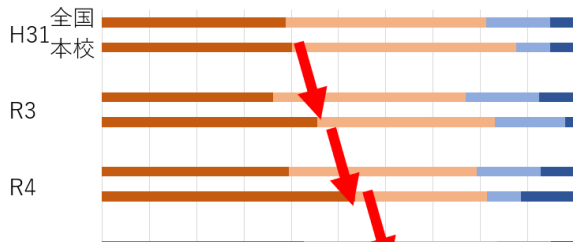
児童が活動する領域が Laboratory, Home, Class と複数になり、個人のもつ長所を出すことができる機会が増えたこと、複数の教員が関わり多面的に評価することで児童が承認される観点が増え自己肯定感の向上に影響していると考えられる。

Laboratory や Home では、試行錯誤する時間が保障されており、そこでの自己決定の機会や失敗を振り返り、次の改善に挑むことができる。また、Class で学んだ教科学習の内容や見方・考え方を使うことが増えた。これらのことが、責任感、チャレンジ精神、学習の活用度合いに影響を与えたと考えた。Home では、異年齢による他者との異質さが目立つ環境であり、違って当たり前であることを前提とする指導をしている。同級生の目を気にするような同調圧力や集団内の優劣を競争するような圧力も同学年集団よりも低い。これらの影響か、食事や掃除、遊びなどの生活面では援助行動を起しやすくなり、援助要請もしやすくなったと考える。このことが、他者への共感性や援助行動への意欲につながっていると考えた。

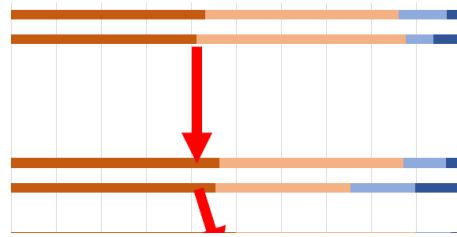
Home で生活することは、上述したような面もあるが、自分勝手や仲間内だけの心地よさは認められない。学校内での Home の時間を設けたことにより、これまで学級や学年で行っていたような運動会や宿泊行事などは目的も方法も変更した。そのことを惜しむ声が高学年（現6年生は、4年生までは従来の教育課程で学んだ）の児童や保護者を中心に散見される。このことは学校の楽しさや友人関係への満足度に負の影響があると考えられる。



自分には、よいところがあると思いますか

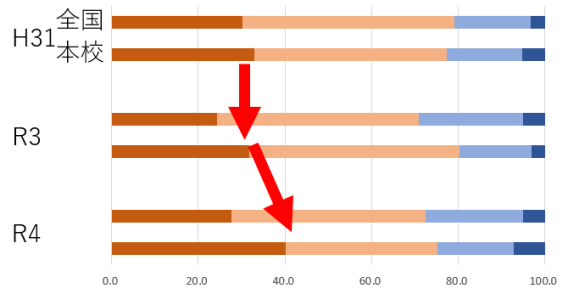
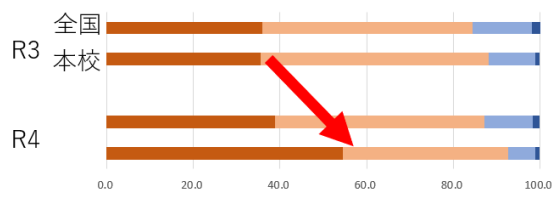


先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか

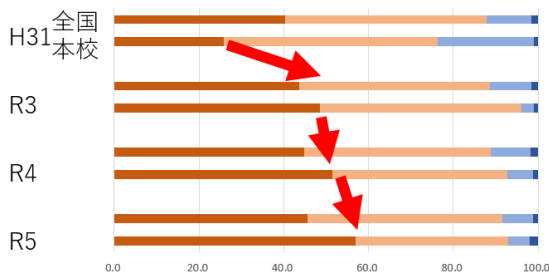


難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか (令和5年度なし)

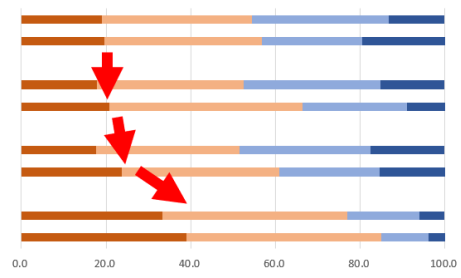
自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか (令和5年度なし)



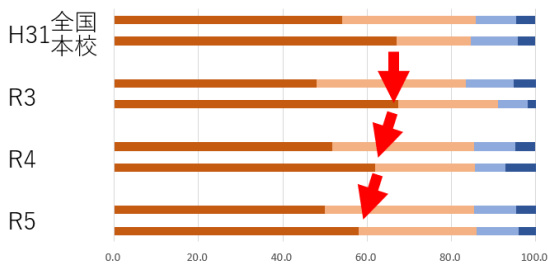
人が困っているときは、進んで助けていますか



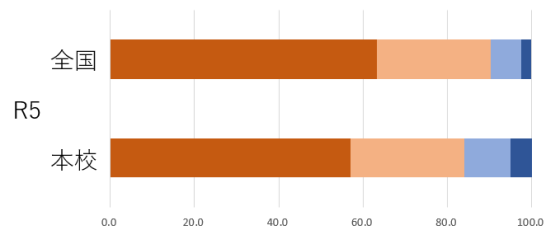
地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか



学校に行くのは楽しいと思いますか



友達関係に満足していますか



## 2 教師への効果

前項で述べた変化は、教員へのアンケートにも多く見られる。関わる児童が増えたことにより、顔と名前が一致する児童が増え、学校全体で児童の育成に臨んでいる感覚は以前よりも強まっているように感じる。これにより、児童からのあいさつや会話も増えた。

以前は学年・学級での矮小化された範囲で最適化が図られる面があった。現体制では、教科担任制であり、Home 制であるため以前よりも個々の教員が最適化できる範囲が狭まっている。教員にとってはこれまで慣れ親しんだ学級経営や指導法が通用しないことにつながり、学び直しや価値の転換を行う必要もあった。これを新しい価値の発見ややりがいと捉える教員とストレスを感じたり、非合理的と判断したりする教員もいた。

### ・学校運営における変化

教員個人の裁量が狭まったことは上で述べた。個々の教員の影響力が均されることと共通の判断基準をもって指導に臨むことは、児童の様子とアンケート結果から概ね、ポジティブな要因になっていると考える。学校運営上も、透明性が高まり、一部の業務の効率化にもつながる。教員の指導力や内容の差による不平等感も薄まり子ども、保護者にとってもより平等で公正な学校運営につながる。

教科担任制や Home 制によって、教務上の時間割作成や学校内外への連絡、学籍管理、会計などのシステムが変更になり令和4年度の3領域全面実施初期には混乱と疲弊を招いたが、2年目は低減することができた。これらは継続的に改善することが可能である。

## 3 保護者等への効果

令和4年度の3領域全面実施時の6年生は最後の1年間で新教育課程に変わり、また新型コロナウイルス対策のため様々な活動が制限された。こうした状況は、保護者に失望と混乱を生じさせる要因となった。

Laboratory においては、児童の好きなことができている楽しそうであることや学びをデザインすることの価値への共感から9割近く肯定的な評価を受けている。一方で、自主的に学ぶことが難しい児童も2割ほどはいるため、手厚い支援を望まれている。保護者も新しい価値観をもつ教育課程のため、家庭での支えが教え込むことになるのではないかと戸惑う意見もアンケートには見られる。

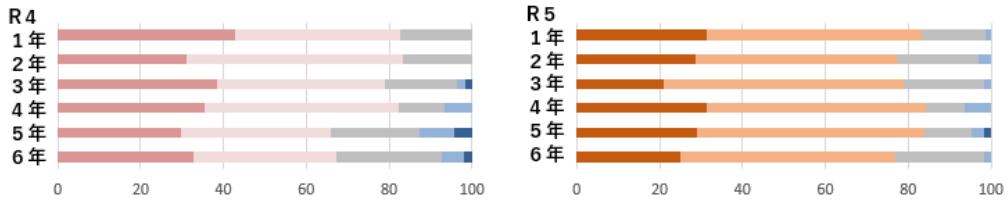
Home は、異年齢でいることの意味や価値は概ね通じ、支持されている。上の学年が良い見本になり、モデルとなることへの肯定もあった。しかし、Home の理念が満たされず、対話でなく、年齢や身体や声の大きさに意思決定が行われた場面も実際に起きてしまい、そのような体験をした児童、保護者は不安や不満を感じる。このようなことが起きないように指導と起きた場合にはその後の支援を丁寧に行う必要がある。

Class については、定期的なテストや面談で児童の学習状況が具体的にわかるようになったこと、教科担任制で授業の専門性が向上したことによる児童のポジティブな反応などから肯定的な意見が見られる。Home と Laboratory の設置により Class は授業時間数が標準時数よりも少ないため基礎学力の定着や中学校への進学の際の試験などにおいて不利益であるという否定的な意見もある。教科担任制のため教室移動や学習用具の管理などは従来の教育課程よりも複雑になっているため、非効率的であるという意見がある。

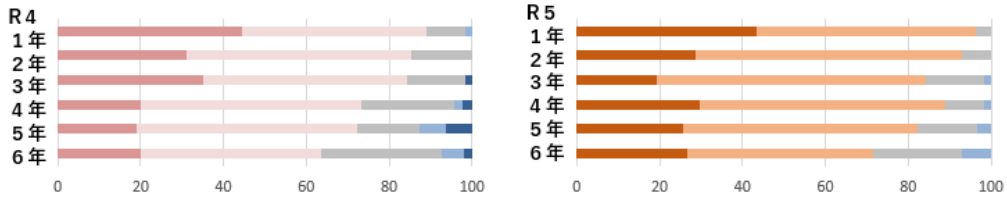
様々な教員が関わることの利点を上述したが、相談するための窓口が分かりづらいことや、面談を行う Home 担任があまり情報を持っていないという不安や不満もあった。

なお、保護者アンケートの回収率は高くなく、6割程度である。

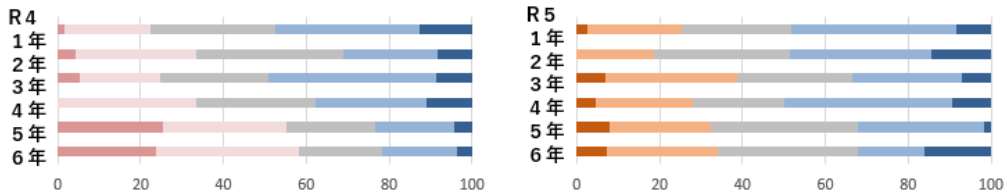
「Home」の時間において自ら意欲的に生活に取り組んでいると思いますか



「Home」の時間について新しい発見や成果はありますか

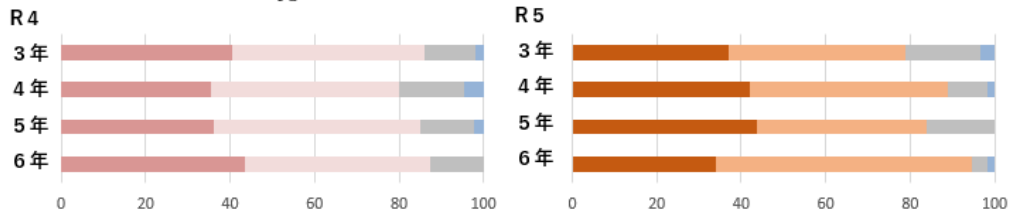


「Home」の時間について不安や課題はありますか

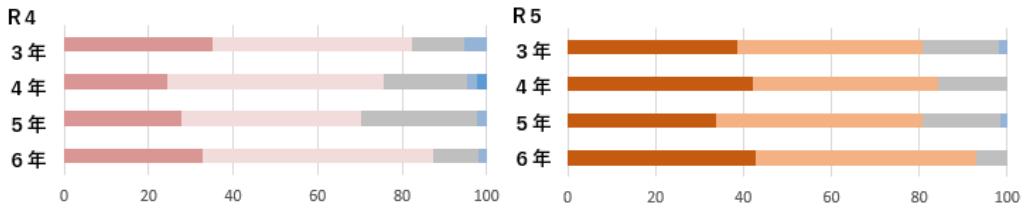


とてもそう思う (red)   そう思う (pink)   どちらとも言えない (light grey)   そう思わない (dark grey)   まったくそう思わない (blue)

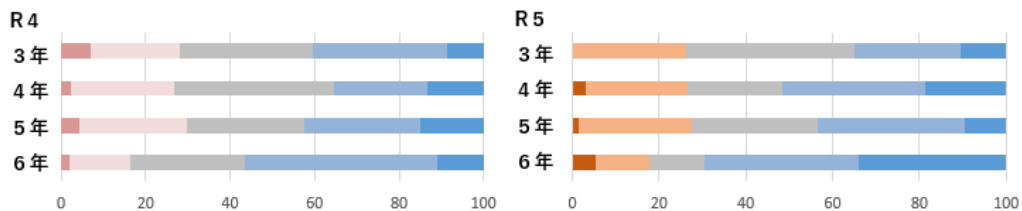
「Laboratory」の時間において自ら意欲的に研究に取り組んでいると思いますか



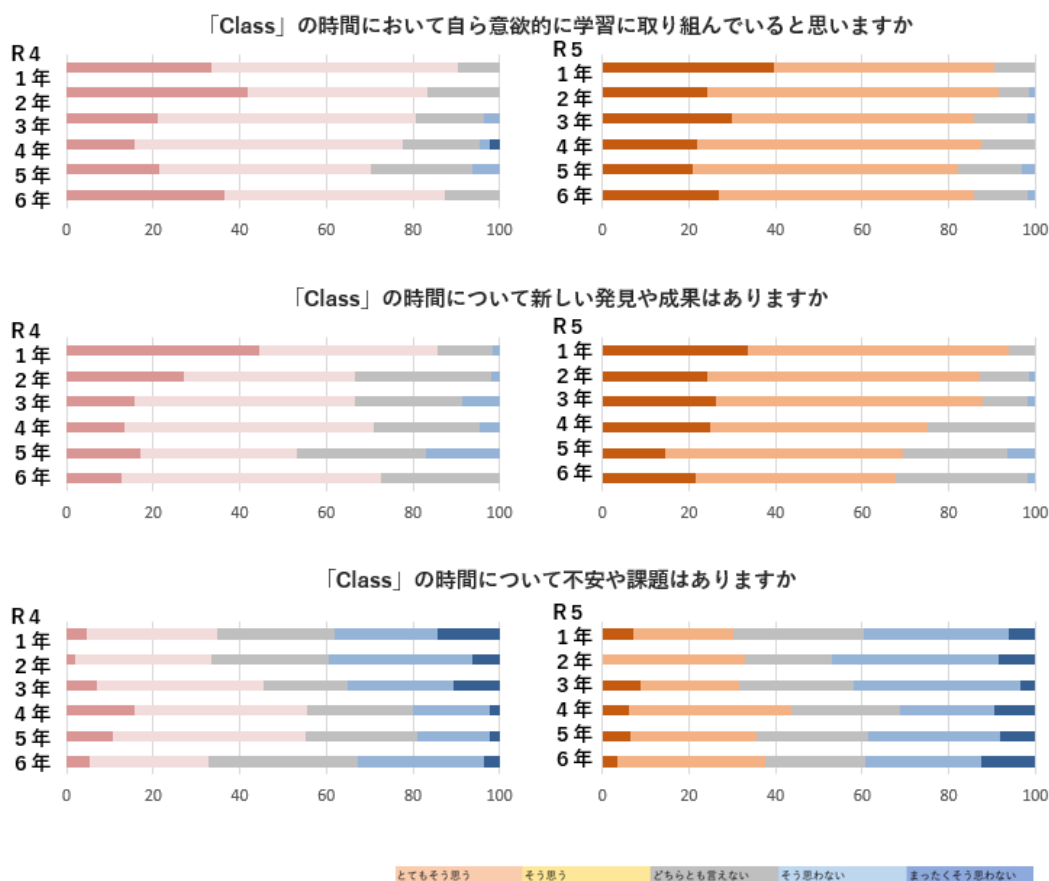
「Laboratory」の時間について新しい発見や成果はありますか



「Laboratory」の時間について不安や課題はありますか



とてもそう思う (red)   そう思う (pink)   どちらとも言えない (light grey)   そう思わない (dark grey)   まったくそう思わない (blue)



### Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

教育課程に大きな変更を加えたことによる変化も大きく、成果も見られたが課題も多く残った。児童、保護者の幸福を願い、丁寧な説明をして、了解を得ることはどこまで行っても不十分であるため反省とともに今後も励む。学校内の教職員にとっても変化は大きく、これも誠実に重ね続けていくようにする。

Home 制を実施したことによる抜本的な変化は成果として明確に出ている。全国学力学習状況の調査において教員の実感を裏付けている。しかし、この成果は、Class 時数の削減や従来の教育課程にあった活動の削減などがある。一般化するには、精査が必要であることと、規模や程度の検討が必要である。

Laboratory も Home も探索的に実施し、実感としての成果はあるものの公教育にとって妥当であるための評価に関しては十分にできていない。教科学習である Class での学びが Laboratory でのデザインの基になっていることが児童アンケートからもわかるが、その相関や因果は明らかではない。

今後は、本研究の課題を真摯に対応しつつ、成果として見られたことについて精緻化・一般化していき、児童と保護者、公教育と地域へ還元することを図る。